特42
442

養老
清經
宋如
亀小所
小袖曽我

五

東京圖書館

和書門	音樂類	函	四七架	二號	二二冊

東京図書館蔵

養老

風も静かなる楢の葉の〻〻〻〻ならさ
ぬ枝ぞのどけき　抑是ハ雄略天
皇に仕へ奉る臣下也　扨ても濃州本
巣の郡に不思議なる泉出来るよしを
奏聞す　急ぎ見て参れとの宣旨に
任せ只今濃州本巣の郡へと急ぎ候

養老

治(ウヤ)や國富民も豊(ウヤ)なるべ方よ
酒あり南の戸は秋津嶋やあ国さ
かりびのさひよりなりなのごろ中
酒をあく浪花の飽よまきりく
一セイ天
年を経しこれ山の松陰よ秋を
ひ水の緑り那ひかりしるれたり老
の坂ぐ来ぎ心りれ故人眠も
年の花よる心へ
茅店の月り晴ぎ雨ぎ橋の雪よ
雲ひ日頭の宣は積きとも老とや
あ瀧川つ水やこころを清しく
上ニ
奥山の深谷は(ウヤ)たるのためうや流
きて仏とよも絶しく長は(ウヤ)
乃家よそべ(ウヤ)ぐ老きぬ門きあるる

よ見も年ふる山もとの谷乃ためしを松陰乃岩井乃水は薬にて老をのべたる心こそ尚行末もひさしけれ〔ワキ〕〽いかに是成老人に尋ぬべき事の候〔シテ〕〽此方の事にて候か何事にて候ぞ〔ワキ〕〽おことは少なかる親子の者か〔シテ〕〽さん候是こそ親子にて候へ〔ワキ〕〽是は帝よりの勅使なり〔シテ〕〽有難や当郡や雲井遥かにみゆる我大君の代々を幾千代とのりを賤き身として今承る下乃言葉よしある親子の民として候〔ワキ〕〽抑此本巣の郡にふしぎの泉出くるよしにて養老と名づけみだれなき宣旨によつて任を

是迄勅使を下さるゝ也おそれて候者を
名付そめし謂を委く奏すべし
先ゝ是は此尉が子にて候又山家の
薪をとりて我らを育み候處にある時
山路のつかれにや此水を何となく結び
てのめば寿命ありて心も涼しく
たちまち仙家の薬の水も
がやと云傳へ承れはやがて家路には
運び父母を養ひあまりけれは老をも
よろこぶ頼みの老をも忘れ水の
あかぬ心の底も越ゆるより羅覺
まことにや此水の絶
せぬ老を養ふ故に養老の瀧とは申
也げにや古今の藥の

水で離れつゝ
つゝあるや所
（阿）
（ニテ）
滝と洗滝坪のど
こけ方の岩間より出る水の泉也
（異本）
拙者もしと来りて
（ニテ）
出井の
（ニテ）
底とみ清くして石乃岩
（異本）
りとなりて苦のむを
（異本）
番のやちよ
（ニテ）
ひつあ苦も
（ニテ）
まろ乃ろう有る薬

上高の水
（異本）
まとよ者を
（ニテ）
元
底
者を
（ニテ）
たよ涼り
ずまして感乃人の
分よ薬とあり
（中ニ）
人行とて寿命も
（元）
（下ニ寿）
（元）
畫まりさの泉
（元）
（下ニ）
たのつきるを
（元）
（下ニ）
（寿）
やの水のもとすれば代々として流
（元）
（下ニ）
乃まの我まるく豊よりあるを始さ
（元）
（クリ地）
（寺上ホカナシテ）
よくく
（元）
ちや寿くて薬う湯の

さらさの世とかたりて薬水よ
水のうを盡　知ゆ川の流きは
絶もして　さすもたすの水よあふ流
きよ浩うもの　消ゆ結て
びしくもの　すよ雲
なりも　長山　下行水の薬とする
きとと　誰が羽　いさや水を結
まんとく水　竈頭の
竹柴の　陰やみそりを重ねる　鄙
籬の　秋花　林葉の秋をはありや
晉茶七賢の　樂　釣　俗倫の濯ひ川　此
水よ　酌まうやめやくめ　薬を君の
たのよ　指　曲水　高　ひ石よ
さうて　そうも　きよ　ちとりら

おもしろく聞くに目もとまるやあれ
と月をくまなく山路の奥の
水すてに行きつ人浪ひ彭祖
かの菊の水たまる露の結ひ仙徳
を受しより七百歳をふる人と薬
の水と変ぬ
「実や薬と菊のう
ば長寿の霊ぬまよ「寿をふるや
あめつちに沈きぬ移の古来迄
花咲宮の殿の「長打と云あり
月見西露のめくみまるく「浪ひ
てはなの父母たる菊の露の菊を養
わらべ洗水よりあれ長の抽ひもく
結ふ手隠さへる山の井ぞ
薬と思ふ人の苦も清水とみる社

蛙かりきれ　平行　六方細さ藁の水
意き沼りて秋君よ袋ゆきをこそ
う秋きれ　テテ行　菊もかれはめくこびろ　平行　初伏しかさ秋
きれかけを左くとめ
く感象くかの亭秋よ遊ゆと
いひあく秋いつきやおく天より　元
空くかやきく　元　龍の響を色をみく

元　音楽閑し花ゆめ見ゆると思て　元
テ三　ねテテ上　有鶏や治まる世代のあら
れもく
ひて出ます　ますやうよ五百の月や
十月のあかきをこそ日の空に曇へ　元
あくを水の　元　茶代泉さようを畫
袋有かきとやあ　上元　見とくも
稽ひ月法乃味ぎきあ代を守る

一、なる　我が此やまの宮居　亦
楊柳観音を隆　神とゐひ　ムやゐひ
ゐ是水波の間のまく　宮殿幾度の
夜の聲　峯の岸やゐの水音
とゝくゆと　上月元　寺上　柏と楠て音楽のひく
き、瀧津ゐもとゐつゐ諸天ゐいきよ
上ロカ　陰よゐ番をとうつる
の影ゐれ

上地
ゐりうゐ　寺當　ゐもとゐいさゐよりさゐの井
水　水　出雲井の　水瀧として
波倍ゐりゐ　ゐまる市代の君を
ゐ　ゐ　ゐ水ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
て陸ゐ　ゐを　ゐ　ゐ代として幾久し
さを雲をゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
玉水ゐ　ゐを　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ

津の水門をぞ[illegible]
元
どさの神代もあれ流れやく萬歳乃みち
元
ながらへ[illegible]

清經

八重垣堀路のうち波の音の堀路も
浦浪九重よりいさや沖つ波　早川
右中將清經乃侍ども淺津の
三郎と申者にて仕も頼もり清經
いづくにか逆徒軍を討まきらかに都へ
出給ふ道にて乃新兵のまこと

より山と思ふ者ども豊前国柳ヶ浦に
伸みて更行月の波まより出を援
ひ〜く成ぬ船中とて皆
涉形見よ髪乃ぬ出を殺 尊きて尚
ゆびあさ命たもとり涉鑑を抜ひと
瀧へより仆 ウヤ 沈狂 ル 鄙の出を瀧より
刷てウゴく 高 つる古郷に首の書よ

にこ〜〜、元〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜元〜〜
ゆうくびとはあうき秋菅てたや時女
元〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜元〜〜
る拉衣ぞほまる独れ多のきてを思る
元〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
くよどりきりく 向 息狂よ昔へ
きや却よ多ろく山ぬ乃よ雲にづ多り
より法津の三郎うまいまくいうれく
山へ 記女 仆法津の三郎とヒが人色
戸前 此方へ来へ抜吹人へ仆乃爲

つかはすべきうへ　軍　ちんに面目もなきに
使よしまりもぐ　廿　面目もなきに使とも
ぐ　軍　いや所存　廿　ぐ　軍　遣ず　廿　軍　の軍
てもに所存　廿　遣ず　軍　遣の軍
みもにつうもなきと弦やつるよ　軍　ちんにと
み　軍　遣ぐ軍　軍　ちもにつうに所存なきに
ひ　ぐ　清經に　軍　に　軍　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ

ぬ道せ乃新兵の手にかゝるとよりハ
と思ひきるかい豊前国柳ヶ浦の沖
ゝて度々自乃使みやりをを授定
ゝ　廿　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　廿　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　廿　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

みず偽り吹つるゝねとられかくれゐても
其ひれあさき世とある秋かなしきれ
行すもちられりきる世中れ此猿
人目をつゝむ我宿乃く垣ねの萩
吹風乃音ともたゝくも君ひとよあかく
の吹しすあれ枕べうへ頃をら悼るの
が月の夜なた行ゝ君ちん子規あ

又和中を
をもめくはちがあかねめく
かたまれハ文箆よ竪れかさを弱 直れては
是を添除して御心を慰めまれかへ
是ハ中将殿の黒髪のやゞされも目もくれ
心まふしずゞも思ひのまさるやみるまよ
心盡しの吹きあわれなうさみまる本乃
やしろまて 手向ゑしてかしゆう

涙と共に袖の露もみだれ髪なりともみて絵
に描かばやとおもふ
あるかなきかなる枕や寐を忘れ
もとめ給へ「有人」は夢ありて
く現とみる眼裏に萎なして三界を
心頭をなして一生ひとすがらやうと
なり世も夢づくしとこそもまほしけれ
いつまで泊まる雲水のゆくへも帰れも同
浮の故郷よ尽とる心のそられさようして
ねよ寐きて人をみてうつつ夢てあ
へ頼そうめくきぬぬ人清經
そそまりてく人「女」みやまとろむ
枕よみ浮世清經ふく海世
ぬ尽しくみをおきぬ長へれば夢ありて
いくそ知へきまそうつつ夢ありとも世浮

をぶえ給ふ紅こき衣おくり命を
まして我と我ぞ捨てけるとて
ぶたりあり　まきるかねてなきぬ恨
やうに　引　ニテ上　ト　ニテ
も恨さ月乃みよとて贈り筐をへ
行ゆきを　ヒ上　いやとよ筐
をとへ思ふあまりこの袋乃みる
ものかあれば　引　ニテ　引　ちよそ
をとこのやうにぶりもとり
黒髪をおひ上へき形をとりかこ
ヒ上　ヒ下　ヒ　ニテ　引
をとりて四しなへ筐や慰めとて乃筐
あれば　ヒ　ニテ　引　わきて
乱きかを乃乱きかを
送りとを筐をとへて有ま恨
ヒ上　ニテ
我ここ捨みて命のうらを　引　まよかこち

世
かてたるく　形そつき　世　くろ髪
上青
うつみをちへはひうへてぐく　行る
波乃手枕とおくへてかいあ波
あれとうつをきは猪窟ぐく
あるうかあ　さうやかうつをぐく
うきれ見あくへ　長くやも有あを
つもぬ　狭くれ　古乃うた

上
詰てをきやくしどへ恨とられ作へ
扨も九州山家の城へも歌よを書る
ちゆ狂よとうもも知あくを書る
うだくせ毎よ取のつく豊前国柳と
上青
つ有よつ　宮やあもくをえたる
浦ハおくを木の柳陰ぐかりそあれ宮居
をちうを　引れうう宮作ハ情よ出し系

詠歌とて神馬七疋に金銀珍
ものきぬ則帯のため成へし
加様よりきは彩も分の恨なる似たる事
あれば君まゝ市代乃
ちりや一門ぞくてもきりて使ふ
ばかりを捨ゝ紙よりあさ
下ちすや

中日ニテ

ちんの歌　抑宮伊勢嘉よ
様ゝ行幸御解ひ東をかきあつも
ぞくもみゝろの錦のうらうりあ
たあ拝と出てかく計　世の中ゝ
ちよ神もあとゝ行の流ん心盡
よ　ちりとも男心も実のとも

清綱

よう思ひ設け秋の言ふ　備へ仕
三寶も捨ぶ心ほうとして門へ
乳ぶ引き出ひ力を打ってそよ車
ばどこくと色遊幸ありもるえ所
宮殿かうきる御長門国へ
歌してばいりへ舟よえ幸ていて
ともあくとしひ心入らうえある

ばうや世中のうつる夢社会あれば保元
春の花青永の秋の紅葉として散るよ
あり字つ一堂の舟あまや柳浦の秋
門の陰まかほある浜波ちちの
むまのる松れ波のちもあひ
多勢ひと防きび寄よ清経へ心よて
めく思ふやうばまっても備へば残宣

あらたなる心魂よ強くとうず誠の真乃
二人よ宮ゐ浮ぶと一筋よるとり
あちきあやどてもきゆべき露乃をを
洞
ぞをきりほうきまれ良よちうれ
あよたちひくいつまくうきめを水
島の流ちてんとるきりべよいく
岩代乃まつとありや曉の月よ嘯く

ききまく船へてよ立ありぶ中ぶり
やうてぬきしぶ音もとやうよさ
あしい風やうをひ朗詠ぶ
うまをかみく終よいつあまの
行ぶ
ぬ言へとまあ心畫よ世
ぶ
てもはかぶ言ぶ強やとよそ
めよひのる狂人と人やうあんぶ

人は何とみるめをかりの秋のそら西は
かたぶく月をみれはいさや我もつれん
と南無阿弥陀仏弥陀如来迎へさせ給へと
唯一声を最期にて舟よりかつはと落塩
の底のみくつとしづみゆくうき身の果
ぞ悲しき　きくに心もくれはとりうき
ねに沈む涙の雨の恨めしかりける契

る　いふならくならくもおなじうたか
たのあはれは誰もかはらざりけり　扨修羅
道にをちこちの立木はかたきあめは
は矢先土は精剣山は鉄城雲
のはたてをついてきやうまんの剣をそろ
へ邪見の眼の光愛欲とんいち通
玄道場無明も法性もみだるる敵うつは

[illegible]ひくへうほ。西海四海の因果をみを
くはるをきりやゆゆへ家朝は十余ゑれ
ぬ法法乃毋よ頼ゑ[illegible]まゑよ鏡ひもあく
ゑもゑゑゑへ言強ゑ言もこゑゑきよ
つひゑ仏事をゑゑ[illegible]あゑ四ゑきれ

宋女

早行

はるゑ諸國一見は僧ゑく作。我此寺
ゑ都ゑひく。洛陽乃寺社詣り
あく行ゑめゑりてひよ見ゑと南北
よしまゑゑやと思ゑ。比ゑやうひの
十日餘り。洛乃都を振立ゑくぶまゑを
ゑめてゑゑめ乃言影ゑも。我ゑ都

物くて里月(ウ)く狂ふあしたの花のさ
霞ぞ深き山の末つゞかずも情の關を
きさこえく(ウ)ぐらの宮井手の里
ごまは見ずや奈良坂やがてとられさと
よつまよきりく　急ぎ程なく春日乃
ちとよきくゞ心静に社に参りつゝやと
思ひ　宮路をさしく春日野の

寺々もいさやしらん　更闌夜去(サレ)りが
みて四所明神の寳前に膝まづきたる
燈もよそを宵きくる數うとく聲す憐
(ト)深夜の月灘しと松の木のまとをり
みれば神の御心にもあかなくやなほ
まさもおを(上)(ウヤ)月よちる花の陰ゆく宮め
みともとう(ウ)　そこう歩みの數よろもゝ(ウ)く

づる梅の花色濃き庭まで色うつるもの
さくの花を尋ねる藤のかげあるに
と言へば答へ
見る女性を尋ねつるかの作
こまるの事ども行きくれぬ
見やりこれ狂ひもとる事ども林
ぞひく家を不審なる

女問 佐古當社の所に居る人
はべるは如何此所よりて
當社の謂を問へ 女 祈命
社とは神讓景雲二年に行円國
平野より出る自山本宮の峯に歌
向かせ行きされば此山本宮山
陰にかくれ水陰にかくれを

陰頼まして義厚や氏人よりてう人
しまれ本寺よりもゆく三條のへ移り
松尾の大山をあつむ紛さへ寺社のは
ちりひうもへのしみ猶もう引しきまき
なごの紫雲一葉も色のよ徐くや
あなつきし情の給ふも何ゆへそくの
まつりひたききさまは陰深すれと今も

みな法相の秘訣をうへ霊地なりざ折かし慈
悲萬行乃目乃歟いざ三笠の山よ長岡
の寺五重唯識の月乃光のみすき乃
まことくまさ引し　陰頼これわりしまひ給
はばかりそめならずとも孝行國去成
佛の神木と思ひ給ひて思ひ給ひそ
ありし日の其初めし給ひ　治まる國ハクヘ方

れバ始めて紀乃みちよりも代々なるを
香殆りて仏法流布の種ひさしく昔
霊鷲山にして妙法華経を説給ひし
今衆生を度せんとて大明神と顕
き此山に住給ひても鷲のみ山とも云
笠の山をも法説セよ菩提樹の木陰
とも盛なる藤咲て松にも花を咲

山ば長閑にて春日山は浄去の春にたとへ
めやく　いかにや猿沢の池にて
隠あき名池のつゆなほ詠めさゝれくはう
承なまちる名池なる細に教へ　乙方
へ昔へ昇てうき猿沢の池なれば久しく
思ふ子細の候へバ此池の邊にて御経を
よみ給ふを聞へ　安問乃ろ

佛事をなすべきと心ざして日高申しへきの
女（サ）「見いだす」宋
女とゝ一人池に身を投げ
ぬ なりぬれども帝は御涙
づきもてうなくたまひ
池のほとりにさうらひ
つゝ心をなぐさうるに
ぬ（キ）「宮」

ひとりの家なるおもうてん。妻はあり
女（サ）「宮」天は帝の位ぬよ。独りは宋女なり
かうはかりとは君は位なり
初は数忠清きさまに
ぬかりしとぞなくは
三しまきさく池をおきをかく
ぬ也 平九 ここ 宮 帝

あるれと男石此猿沢の御幸ありて
宋女う死骸を殺害せし
ちもとうかくうし翡翠乃心
さ嫉妬乃髪かつら黛墨
たんくう原 寿永の姿引うく
池乃そくつよみうれうくをもあくれを
男ちく 見ちてうねくたまを髪を

猿沢池乃底をしぬ入れて
悲しきと数恵よ鏡 晴天ありれ
ちもとうとみうれさを
ぷと入はあさ水乃月さる猿沢のいを
ぷ水よ入よりもし池乃底よ入よきり
池乃浪よる行ける底とれてぷ 俗

さんしつれ給ふのぶよめれきみかみとよ
ぞみ経法ぞ成あまねく　有難や
妙なる法のちからとぞなりにし心の水とぞ相
ぞおりてく怯そしくあり人ぞよ心
さる人とまれ池乃蓮の夢にも倫き人能く
さのみ頃へそよ　不思議やな池乃
汀に顕れ給ふは宮女とぞ見えにける人かな心

悦ありかたき乃御宮女まことに心を
あらはれ給ふ佛果をえしめてたまはりま
粉　かようとも同じ仏性也行業
みな浪乃とくどく　水の底あまうるこの門や
乃多宝寺宮図ままく　悪者成佛
うつひなし　まして人間にて今く
さりや龍女のまくまくのまに変成男子

まり安全と都里給ひて志るしを有れ
みなみの南の岸に至りて見れそ
南方無垢世界にまれんまで轉じやく
宮やしろに奈良の都乃代をとく
神と君との道すくに國家を守り給ひ
さりや　我朝に君に仕へ人其志深く
然れば保まさ年ふりて安全の花衣乃

ごろ淺乃心をくだきても鳴るに仕へ甚れ
惜まく女性の身に其名をひろめ情うちた
こそり寧部によるあさからぬためし世
あつさ弓ひきかへりの色香葛城
の大君勅に随ふみちのくれ竹の世
ちきり深も皆ともにおろそかなり
とてまつきをかゝりきれども

都も寂しき大君心とけきりし家
女郎花のかちまきをまとの塔の
露は情を心とけ親感ひらきなる
うゝ引ぬ秋の山陰さ入る山の井
あさくさ人を思ふの心の乾ひを
ぬ雲はなり雲はなり安今をあ
とや 上女郎 歌 きた寂しの戯しの女

島はどきよりの雲の
抽ぬ秋のやさうの秋迄の
さうの折も寂しの衣はなるて
宮人の小忘夜桜といかさ有なり
ぬ拝れ拝もあ舞
歌の曲拍子を紙ろ人狂ひひらをて
松楽妓ろ寂しの衣うたあ

たゝ[illegible]や曲水の宴乃有時津出雲
堂ひく日ゝ[illegible]ぶの月のまゝ山ほ
と[illegible]きしぶ[illegible]ひ島[illegible]に[illegible]とけ
て遊樂乃月よなを
ごすち雪の[illegible]
そ[illegible]乃万代迄よ
初と[illegible]

上安男 月よなを
天津
万代と限り

十

[illegible]松の葉乃敷[illegible]
[illegible]うゝ[illegible]
天地と[illegible]
[illegible]猿沢の池乃面や[illegible]澤の池
[illegible]面よ水濁[illegible]
[illegible]りゝ[illegible]雲起り[illegible]
[illegible]ようと打[illegible]遊乃[illegible]

宋女

在二宋女のたまとて屋とおよ讃仏堂

十二尾

下ヤ

の因縁をよく吊を絵へ中と

キウ

在下

てよ浪よ入

りきも

通小町

早川

是ハ瀬乃山里よ一夏を送る

僧よく作ぬ寄よいつくも衣を袖

天毎日こ乃ん瓜水を持てきたり

作ぬこ日も暮りてくいつ叩去と

名を尋やと思ひ

第四番

ひろ瓜水

もたきあのくミヤ白くあ神ゥ出てき

サレ廿

見へ市原野のあたりよ侍女たち
梅も八重の山里よ貴き人のほとり
に行よりつもこの乃つまなをきちく
まりしへ乃月もよまいりそやと思ふ
めりよりぬ社なりて人　早川
春ものへ人乃ものすりに侍
物語人　廿
ひろ人乃ものすりに行ろう

廿

ウ
ものすりに乃ものすりに侍ものすりに
廿
ものすりに車よ仕ろ立嵐よりろ落
上廿　廿
葉　手人乃家乃ものすりよ　廿　人

上廿
九乃かすのまの柿　山乃人乃ものすりに
廿
宮の梅　蘭の桃　花乃ものすりに桜
廿
あるの廿乃ものすりに　花をものすりに
元
みまそて　内大小ものすりきん

元二元一二下二二二

とはいと薄ばかりとありぞ流れ
の小町乃亭也ぞ俤ハ難ふ有もなく
又ハ女性ハ野小町の幾重と思ふ
程よ似寄所所よりゆさでまちつの跡
を尋ぬるやと思ふ　上言　こつの草庵
を立出ぬ　オウ　夢ゆめ露ちまき
き市原野へよ寄ねゆ　元元　荒ちへ
書をたき南無幾霊成仏ぞ出ぬ　女上　新
生死世間苦提　引　ひらつの僧の
ちひやか同しく戒ちつきを捨へ
僧　シテ上　いやうかまし戒をを捨つ
恨へしぞや　たまへ御僧　女
いつよ成ぬかるる法あくも程甚若
　シテ上
患をんきんとやみりみるたよか

あまたぶ一人佛道をおこしわす
思ひだとさかうへのちよ哀かさねくう
きめて三瀬川渡てあくに僧
乃ざつを法へるうひもるまゝだや
里給へやぶ僧ちう上方三 上方月 おも其方へ
遂ふもうく戒力よひうれしおとかム
道をあらうを哀よ戒をうを法へ

廿上
人心をうう雲乃我へくうく空の
月ぞくに僧よとうれんと落て
月をかきたて つめとわきもりよ
ちくうくさ ちくまねくへと度きか
廿上
ちひきを乃ちをきみくまねくちう
ちよと度ちまう ちくへ煩悩の
ややなうくやたまう

女上 おくるる袖や袖をとらくらんとも
世オ 世ハ ひとり袖もひとりぬる 我袖も
ヒ ヒ 宛ニテ下ラ 平内 拙
きぬぎぬの露深草の小野
ヤア
小野小町四位玄蕃かねみまさ
や逆乃ゆよ車乃揚よ百夜通ひ
しをまちくたみをえ
女上
ちり秋の白雲乃かれ迷ひ乃ち

きくへ 思ふよらぬ車乃揚
ト ニテ行
よ百夜通へ偽つを外と思ふ
ト ニテ行
嘆こよ君ひ車乃ちよゆき戻
女上
車のわやをまつ
ニテ行
ひしくそ
女上 上ハ
いつう思ふ事
ニテ上ニテ
城の本陣の星よ
ト ト
あれを 君を思へ
女上
拙を

すゝき　元　シテ上

笠　六

とや竹乃枝　シテ行

月よりも暗くて　シテ

独をとゝまる　シテ

ちくゆきて　シテト

笠

乃て雨乃長き　シテト

月乃ゝ宮　行

ゝ口もおゝ乃や　笠上

ゝ乃屋くを　シテ

ゝ乃時乃ゝ　シテ

乃ゝ乃ゝ　シテト

ゝ乃ゝ乃ゝ　笠

乃ゝ乃ゝ　笠

ゝ乃ゝ乃ゝ　笠

ゝ乃ゝ乃ゝ　元

ゝ乃ゝ乃ゝ　行

ゝ乃ゝ乃ゝ　北

ゝ乃ゝ乃ゝ　シテ上

ゝ乃ゝ乃ゝ　元

月乃ゝ乃ゝ　シテ上

ゝ乃ゝ乃ゝ　元

ゝ乃ゝ乃ゝ　行

ゝ乃ゝ乃ゝ　北

ゝ乃ゝ乃ゝ　行

ゝ乃ゝ乃ゝ　北

ゝ乃ゝ乃ゝ　笠

ゝ乃ゝ乃ゝ　シテ

ゝ乃ゝ乃ゝ　北

ゝ乃ゝ乃ゝ　元

ゝ乃ゝ乃ゝ　元

うちねもつかつ　元ノコトヲトレテ
うちうちと畫しくて　上ニ月ニ
おくよりそれ　揚の
ぬるとおよ　元ノ十九日ちり
ぬるとおよ　元ノやて
ぬるとおきて　元ノすきいな
笠をかぶり　元ノかぶれ
蓑をぬきて　元ノぬきて
もの　元ノもかさ
ねうちしちまの　元ノ
ぬらさぬ　元ノ侍ん
つかやとい　元ノやきも
茅の　元ノ長の
ろひ　元ノ欲酒
ひとくも　元ノまた
世と　元ノ一会の

乃つとを滅して小野の小町をしか
侍もぞよ佛道ありよりく

八尾

第四人

小袖曽我

命をしかの隠さとく冨士をそ
野をかつよ見えそうに十郎
祐成をいかも頼朝の仕特
よ市をも同我をもをしまず是
成付宗に毎ろく着に勘當を
に弱よど直しつきて仕かりよ

八月

出でやと待つ。サシテ時をしたい建久四
年ばかりの半ばの雲、月雨雲
よふりまさて、四人かつこまたらやしら山
のどとしの鹿の見月あり。鎌倉殿
は狩りに出給ふ。たらひあさけるか
シテ上
東八千代の長もも皆は侍よまる
あれ給へ。下四人
歌ひて謡ひ紙経も御供ア
さぬ事なりしだらひを出ぬ
夏野に鹿あり。たばひくやたやと
まひをとり狩人よまきれうち出る
上ヨ
人ちあ大内山に隠
ウヤ
ウヤ
てうきとしをしく棹引くやうう
下ヨ
よあり鹿ようを拾経を射やくめ
トヤ
てぞとよりの根よあまりやとウ思る

立ぬるうり殿とへ君乃法とうめ
ぶしそれとそれ
ぶしそれとそれ
ぶしそれとそれ

久しきあひだ狂ひ回顧乃ため
富のみちとやはり狂ひ
男ゝ子よ家かためば特よりいづ
うやいつし親子乃はたらしめ
つゝ口ほうとやと男お
うも付家べまつ乃ゝあれたもの
こゝ十二月紀元
陸ゝ乃ゝ風乃山乃景乃雲ゝ

ゝ乃ゝ屋ゝ乃ゝ子ゝ乃ゝ同
ゝ乃ゝ蘭ゝ乃ゝ
そたてしぶり
ゝ乃ゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ

小袖

出でぬれば日本一の花きんてん
あれはせまりあつてかりの房をも
つてきた人トキは墓うすはきまいり
きりのてんぐそくはまりしまり
ぬれ墓はは住まあ心つてぐ急そは
作へトキめりよは書の房は時家か
まりてる曲りまりやへいけう

上京

かりの乳母遠心替りしかもとり乳の乳
大の野寺出りたはよりぬりや時
家かまりたる使それくや作へ
墓はりきや狐水人今まりぬぐりを
乃禅仰ぶ寺まりりれまりて子い
あるお時寺としたりや今男日
出りりぐ根乃寺者箱を

こしえを者うでれあらハ母う出家ゑ
ぶんとやしをきのうちうしほとり
勤苗をしよ行て見まて来行る
ぶ宣てハ勤當ゑや伊豆箱根富士
拾規もち質をよるほけなも勤苗と
（トキ上）
ぶちうことゑ宣ぶと（上ハ）たうく
うへうれてをうきんとゑ苗宮もあき

此ゑうおうたくゑ責てとゑとめ
ぶ蔑れ様もれうりあれ情あれ待
（ヤ）（ニテ上）
事や（ヤ）祐かぶ（ハ上）ぶくせをうて時宮う
どきうつたうとよきうと門を
（ヤ）
ゑやヱうりやてあくとまはきを
（トキ上）
拾ぶきて出ぶうきを宮ぶくを来ヱ
（ヤ）
たうぶうれても牧やう校あへ

小油

「こゝ、、」「ひろく」「ミ、」「ていは」「掘きらん」
何と法度作ら「ときは」「外」の「市」「機嫌」
みなく「ねがう」「ねがくて」「市」「動」「商」と「仕」「出」
「ぬ」「ぬ」「ぬ」

みうりよ出へきの処よ時宗う事をヤ
さん祐仲たよ出動者といや能と義
を業ったるよ　如て祐仲をを
仲ニ元ハ里ひ給うあうや者とひ時宗出
家ういと風をやとも兄祐仲よ
郎等もあ　ざうもうよ思うあり
ざ元ハ　ばうもうへよん捨うとがつく

ばうりうひて　ニニリコヒテサシ　祐。義悲の母せ。や「ニニ元ハ」へ
きれ　うまきよ時宗を法師あう
ぬとひ御動者ひ行よ者うひ
出家ばうがとも我う事いせよ
かれあ　ぬきんよかうまたそ
敵をうまんの出家ひくくまう
乃為あうひ宮も行ひ賜ま

ぶ神

ぶもうまうめ雲、雲浦鳴りて乃
ちちは寿みて明らかなるやしや男よ
ぶ「ぶ」ぶぶぶうぶぶぶぶぶぶぶぶ
ぶ時宗ぶぶぶぶぶぶよりぶぶぶぶ
一部ぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶ
現世安穏後生善所と祈念する
ぶ魚尼ぶぶ六萬反ぶ念仏行津殿

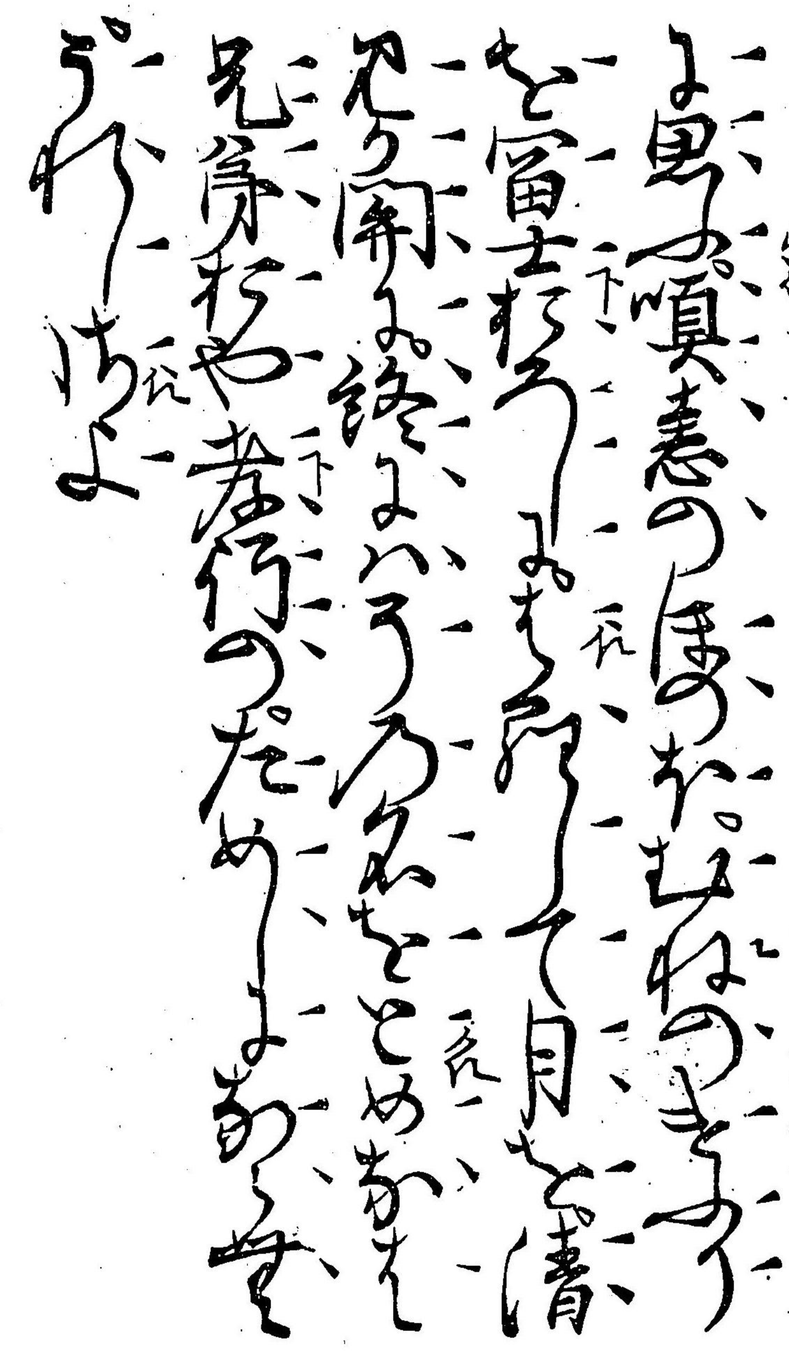
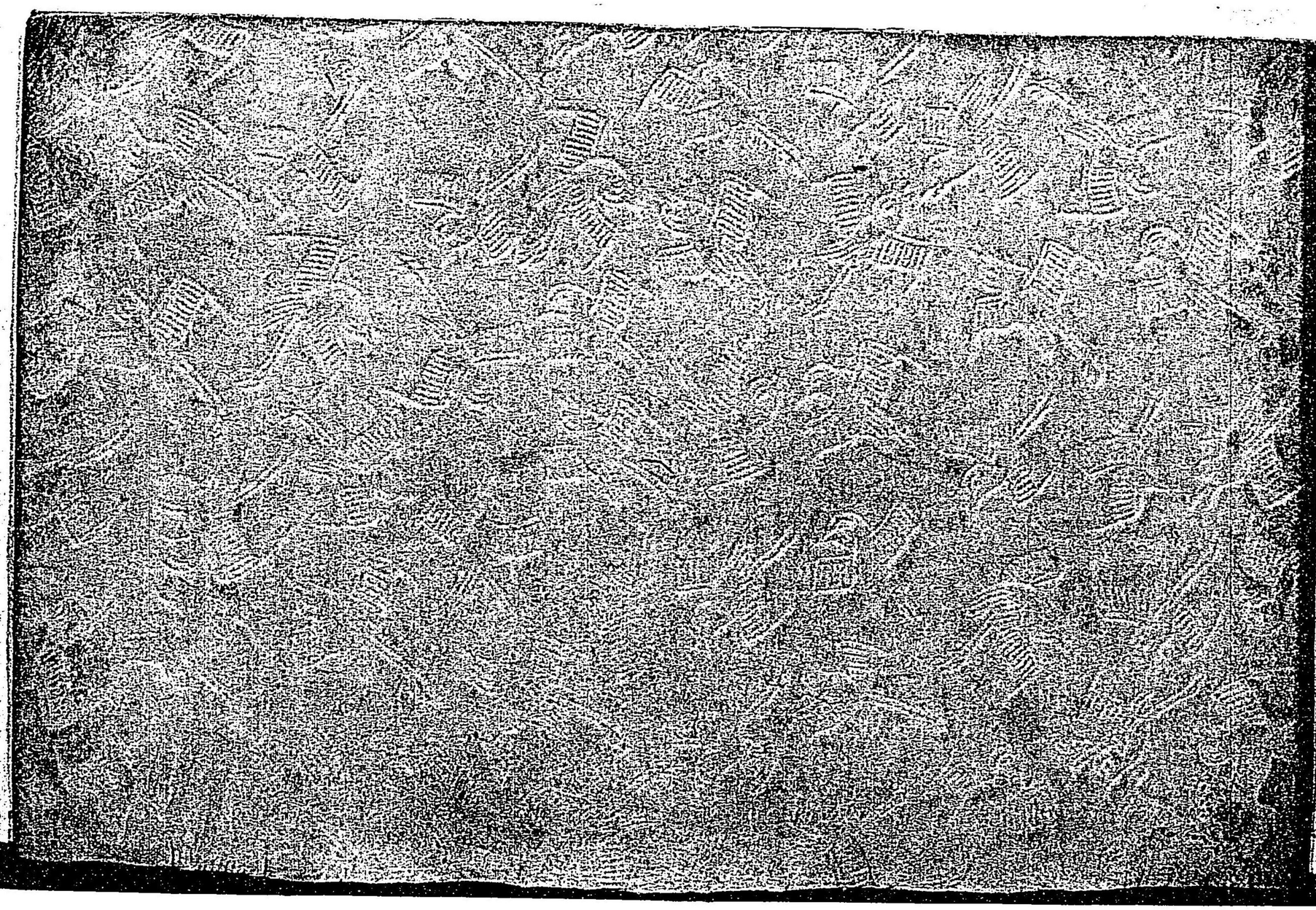
ぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶ
此ぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶ
ぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶ
門ぶ浦ぶ眼ぶぶぶぶぶぶぶぶぶ
ぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶ
や漁捕ぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶ
「ぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶ

背を思ひ出て杉の茅澤山ばかり
くらみて父も母をも世給ひやう
とても猟場と名あらはおとしも心
もうきもちもとも恨うまも兄弟
嘆くたくさ出きれ母の色とあ
きあきとあ信人とよ不孝とも
動角ともゆくすくく時宇とて

あくく出きを給へ兄弟へうれ
しきまよりまろやかたやかたを
思ひもやすなきのおたりや祐成
やよりくどきしひろかんたう
ゆくなくあくうちうきまうて
猟場へ入出いちひて法ろく
めりよ時宇ちうしまりてでう年

月の清かりしかばいとゞ
光ほと時字つくところより贈て
風流なる人のおこす
有難やあまりの嬉しさに落涙
清酌よりとりく時宗と
祝言の
雲井よりあきてよりの根の
置を

めつらしく鶴の如かりし
其ひまよりくゞ兄弟
やかまりの親子と思へ涙
もつきあぬうち話をかうも
よ待てまやもとゞ眠りてゝ
出ぬ前のつきをかりて年
数の好きの不埒をとゝきんと



右之本者観世太夫織部
章句眞本令版行畢
正徳六丙申歳弥生
天保十一庚子歳孟春改正再板
皇都二条通御幸町西江入町
山本長兵